

古武雄探訪

古武雄の歴史は、文禄・慶長の役の際、武雄領主後藤家信が朝鮮から連れ帰った陶工、深海宗伝の一人が、武雄の武内地区で作陶したことからはまったとされます。

その後独自の発展を遂げた古武雄は江戸時代に最盛期を迎え、当時の登り窯の数は県内一を誇りました。

江戸のモダンアート

当時モントーンが主流であった中、古武雄は、最先端の技術で表現する多彩な文様が魅力でした。その常識を覆す、斬新で高い芸術性は、現代アートにも通じるとされ、現在も注目を集めています。

古武雄の典型的な技法としては、緑褐釉、鉄絵緑彩、象嵌、刷毛目などがあります。

市内では今でも古武雄のモダンなデザインを引き継ぎながら、時代に合った、使いやすいやきものが多数生み出されています。

象嵌(ぞうがん)

素地がまだ乾かないうちに文様を掘り、その部分に異なる色の土を塗って表面を削り取ると、くぼみにその土が残ります。文様に異なる土を埋め込まれたものが象嵌とされます。



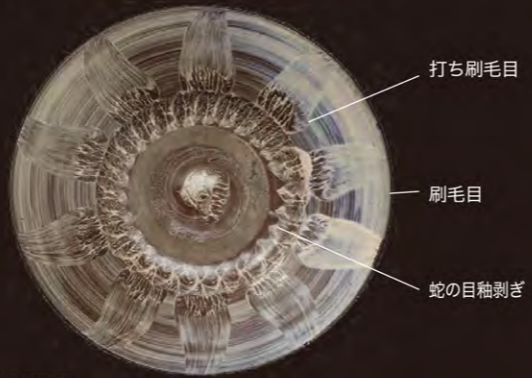
PROFILE

象嵌鶴文水指 (個人蔵)
(ぞうがんつるもんみずさし)

17世紀中頃～後半の作品で、口径12.8cm、高さ18.8cm。直線的な胴部を持つ水指で文様に象嵌が施されている。上下に描かれた波状文の間には6羽の鶴が象嵌で描かれる。(写真提供:九州国立博物館 写真撮影:山崎信一氏)

刷毛目(はけめ)

地が黒い土の場合、白土をかけて白くすることを白化粧と言います。これを刷毛で行い、刷毛の塗り目を文様のようにしたものが刷毛目と言います。



PROFILE

打ち刷毛目花文大平鉢 (個人蔵)
(うちはけめかもんおおひらばち)

17世紀後半～18世紀前半の作品で、口径47.3cm、高さ12.3cm。白く模様になっている部分が刷毛目の技法で、随所に施されている。

(写真提供:九州国立博物館 写真撮影:山崎信一氏)

鈴田館長に聞く！古武雄講座

緑褐釉(りよくかつゆう)

皿を回転させながら水に溶いた白い土を刷毛塗りした後、櫛で模様を描き、銅分による緑釉(緑色)と鉄分による褐釉(茶色)を掛ける技法。



監修

佐賀県立九州陶磁文化館館長 鈴田 由紀夫
1952年佐賀県生まれ。77年九州芸術工科大学卒業、79年同大学大学院修士課程修了。2010年より館長を務める。



PROFILE

緑褐釉櫛目草文大平鉢 (個人蔵)
(りよくかつゆうくしめそうもんおおひらばち)

17世紀前半の作品で、口径50.5cm、高さ14.7cm。大胆な櫛目の模様と二彩の表現は、武雄を代表するものであり、武雄の陶芸史や工芸美術史を考える上で大変重要なもの。

(写真提供:九州国立博物館 写真撮影:山崎信一氏)

江戸時代に作られた武雄の磁器

今も発展を続ける武雄の磁器

古武雄と言えば、陶器のイメージが強いですが、同時期に磁器も生産されていました。

主な生産エリアは山内地区と川登地区です。

有田に近かった山内地区では、有田焼の原料が供給されたことにより、江戸初期には板ノ川内山を中心に磁器を生産していました。江戸時代に生産された磁器の中でも百間窯で作られた製品は、多様な文様と種類に特徴があり、初期伊万里の中でも特に高い評価を得ています。

一方川登地区では、神六山南麓で産出された神六石と天草陶石を使用し、江戸後期に磁器生産が始まりました。この地区での磁器生産は発展を続け、明治期には精巧な透彫装飾を施した「含珠焼」が開発され、宮内省や皇室への献納もなされました。

江戸時代から続く、武雄での磁器生産は時代に合わせて変化しながら受け継がれ、現在でも個性的な作品が市内各地で数多く生み出されています。



PROFILE

染付鷺羽根文皿 (佐賀県立九州陶磁文化館/柴田夫妻コレクション)
(ぞめつけさぎはねもんざら)

1630～40年代の作品で、口径15.1cm、高さ2.6cm。白地の素地に呉須(酸化コバルト)を用いて下絵付けを施し、さらにガラス質の透明釉をかけて焼き、文様を藍色に発色させた、磁器に多く見られる染付の技法を使っている。



染付果木文大鉢 (山内地区・百間窯製) 佐賀県立九州陶磁文化館蔵



含珠焼「染付牡丹文透し鉢」(武雄市蔵) ※古武雄展では展示なし

古武雄歴史年表

- 1590年代 武雄領主が朝鮮陶工深海宗伝らを迎え帰る。(肥前陶器史考より)
- 1599年 深海宗伝らが武雄の内田(現在の武内町)に開窯。武雄でのやきものの生産が始まる。
- 1610年代 武雄で山内地区を中心に磁器生産が始まる。
- 1618年 深海宗伝没(61歳)。妻百婆仙は一族を引き連れ、有田神古場へ移動し開窯。
- 1629年 「寛永六年八月十五日 川古村善左門」銘の甕が作られる。
- 1804年 川登地区の小田志山で陶器に加え、磁器が焼き始められる。(西川登町史)
- 1830年代 武雄領主の御用窯、三ノ丸窯が開窯。(現武雄高校敷地内)